

令和8年9月18日

コミュニティパークを考える会
代表 手島 和文 様

江府町長 白石 祐治



「コミュニティパーク事業の再検討に関する要望書」への回答

平素より、町行政の運営に対しまして、格別のご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

このたびは、コミュニティパーク事業に関する貴重なご意見、ご要望をお寄せいただき、誠にありがとうございます。

いただきましたご要望につきまして内容を精読し、下記のとおり回答いたします。

今後も、町民の皆様の声を大切にしながら、より良いまちづくりに努めてまいりますので、引き続き町行政へのご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

「コミュニティパーク事業の再検討に関する要望書」

■『全体事業費削減の可能性について、行政、議会で慎重に審議していただくことを要望いたします。』

「慎重な審議をしている結果の事業費です。」

■『…毎年発生する運営管理費・施設維持管理費(未計上)があり…』

→行財政運営は基本単年度予算で施行していくため、まだ建設がされていない建物の運営管理費・施設維持管理費を予算計上することはありません。

しかし、運営管理費・施設維持管理費についても、検討を重ねた省エネ設計を行っています。

【ZEB Ready】

ZEB Ready は、一般的な建物の一次エネルギー消費量(建物の冷暖房、給湯、照明など、建物で使われる設備機器が1年間に消費するエネルギー量)を50%削減(計算上)した設計に与えられる指標であり、到達できない建築がかなり多いのが現状です。さらに1%でも2%でも減らすことは、かなりテクニカルで難しいのが実情です。その中で、今回は50%+3%で53%の削減ができています。これは、無理に南側に大きな開口を設けることを避けたり、設計上の工夫で、明るい中庭園庭を包み込む(囲む)ような開放感のある開口は北や東を向いていることで、輻射光という安定した光を採り入れながら、熱負荷を抑えることで、省エネに寄与しています。ガラス(サッシ)はむしろ北側、東側に多いので、日射取得は限定的であり、むしろ園庭を眺めるのにダイナミックな役割を果たしています。照明や空調等の設備技術も、省エネや心地良い空間を作っています。

「ガラス面の多用」は この“コミュニティパーク”の実現に当たって欠かせない仕様です。保育園児にとっては快適で解放感があり、何より明るい教育環境の確保、に繋がります。町民にとっては開かれた公園の象徴とも言える仕様です。ガラス面が多いにもかかわらずZEB ReadyのBEI値0.47を確保出来ているのは ガラス素材も省エネ素材を使用しており、外壁面・屋根面・床面も高断熱仕様に、また

空調設備に配慮し建物全体で省エネのバランスをとった結果です。ガラス面の多用に因して冷暖房費が嵩むというご心配はクリアできていると考えます。

一方、ガラスの清掃は必要となりますが、ランチルームのサッシ、保育室・遊戯室のハイサイドライトのサッシ、いずれも通常運営には専門業者の手を借りずに手入れ可能な設計となっています。

【施設維持管理】

まず、外壁、屋根とも耐久性耐候性に優れた材料を用い、ウッドデッキ及びオーバルデッキもメンテナンスフリー材を用います。複雑な形は、子ども達が直線的に遊ぶのではなく、「その先に何があるか」という期待感を持たせたづくりであるとともに、骨組みは多角形で構成するため、過度なデザインでは決してありません。また 2 階建てということで維持管理が大変になるということもありません。今回は、オーバルデッキが全ての建築に付属しているため、メンテナンスの際の足場としても用いることができ、むしろメンテナンスしやすい建物と言えます。空調は床下輻射空調のため、床暖房の機能も果たしています。通常別途必要になる床暖房をなくすことで、コスト低減にも寄与しています。このような設備的なアプローチからのコストダウン、そして合理的な構造架構(多角形)によるコストダウン、そして決して華美な仕上げにしない適材適所の仕上げによるコストダウンを図り、昨今の異常な程の建設単価上昇の中で、妥当性のあるコストに収めています。

つまり外装と合わせてもイニシャルコストとライフサイクルコストの低減に配慮しているということになります。

趣 意 書

1. 保育園と公園の組み合わせについて

■『当初、「保育園らしくない保育園」のスローガンのもと、最良の環境を提供しようとスタートしたプロジェクトが、高額補助金を目当てにした「保育園」+「公園」すなわち「コミュニティパーク」に変貌しています。』

→ 最良の保育環境を提供することの答えが「保育園」+「公園」、すなわちコミュニティパークだと考えています。

コンセプト設計からスタートしたこの事業が、国の予算獲得を目的としたものと、お受け止めのようですが、コンセプト設計から建築構想ができあがった時点で、交付金の申請にチャレンジしたものです。この施設であれば、国の支援(交付金)を受けられるのでは！と、立ち上がったものの、そこからの挑戦は決して平坦な道のりではなかったことを改めてお伝えしておきたいと思います。

保育は、決して保育園の開園時間にだけ行われているわけではありません。家庭・地域に帰ってからも保育の時間です。地域で子どもたちを育てる、子どもたちの社会性を育てる環境をつくるということとを、コミュニティパークは目指しています。

■『「園児80人ぐらいの閑静な保育園」と「年間12万人集客のにぎやかな公園」の組み合わせには、かなり無理があると言わざるを得ません。』

→12万人の根拠について、令和7年9月19日の江府町議会公共施設

建設調査特別委員会でお示しいたしました。＜別紙資料にて、ご確認ください＞

8月21日(金)午後7時から役場防災会議室で開催しました、「江府町コミュニティパーク事業に関する報告会」の際に、12万人の県外や町外の人がくるというご発言がありましたが、別紙資料に示しているように、江府町の方の利用比率が一番高いということが大前提であり、決して県外や町外の方ばかりが利用する施設とは想定しておりません。町外や県外の方々ばかりが訪れ、保育への悪影響を及ぼすかのようなご想像は、セキュリティの面からのご心配に及びません。コミュニティパークは保育園でもありますので、もちろん12万人の中には利用者としての園児、その保護者、保育士も入っております。

近隣施設の米子市児童文化センターは年間約16万人、キナルな
んぶは年間22万人(玄関通過カウントのため同一人物の往来の可能性あり)です。しかし両施設は閑静な時間とにぎやかな時間の両立を果たしています。後述しますが、保育園に來ている園児が公園に來ている方と自由に触れ合いができる構造・運営とはなっていません。もちろん園児が來ている時間帯には公園來場者が保育園側へ進

入ができない仕組みになっています。こちらも住民説明会・保護者説明会でお伝えし、そこにご参加いただいたみなさんにはご理解をいただいている事項です。しかし、外の人と一切断絶しているというものではありません。保育の中で必要とあれば、保育士と園児が一緒に公園サイドに出かけ、子ども連れの方や公園を訪れている地域の方にすぐに出会い交流をすることができます。他地域を見ても、保育園と公民館や高齢者福祉施設などが複合されている施設はたくさんあります。しかしそれは利便性のためであり、子どもの社会性を育成するという目的で、保育園と公園を融合させるという考え方で作られている保育園は、私たちが調べつくした限りではまだありません。しかし、集落に帰れば遊ぶ友達がいない、外に出る機会が減るから地域の人に出会わない、人口減少が子どもたちにもたらしている影響を新しい保育園の形で解消をしたいと思っています。日本一の定義を示すとしたら、江府町の子どもに日本で最初にこのモデルの好影響を受けてもらうことです。

その心意気ですので、決して「保育園らしくない保育園」の「理念」や「運営方針」が置き去りとなるとは考えておりません。

また、12万人の集客目標年は令和13年と住民説明会でお伝えし

ております。初年度から建てたらすぐに人が来るというような安易な考えはもっておりません。5年かけて12万人を目指しています。建てた施設を最大限有効に活用し、利用の仕方も住民のみなさまとともに育てていくことが建築コストをかける意義であると胸を張って言えます。

2. 公園は箱もののひとつ

■『「…第三者との偶発的な交流は、恐怖の対象にもなりうるのではないのでしょうか。」』

→1.「保育園と公園の組み合わせについて」で記述したように、保育園児が保育中に偶発的に恐怖を感じるような出会いに直面することはありません(住民説明会・保護者説明会で説明済み)。

一方で、保育の一環として、保育士が子どもたちを連れて公園側へ遊びに出かけることは想定(むしろ推奨)しています。保育の目的や内容、時間帯等に応じて、保育園内で保育を行うのか、公園で保育を行うのかを、保育士が柔軟に選択できる環境をつくることを考えています。

第三者との偶発的な交流が常時生じることに不安を感じる方もいらっしゃるかもしれませんが、コミュニティパークでは、保育士がそ

の時々状況に応じて活動する場所を選択できる環境を整えることができます。

単なる「偶発的な交流」を生み出すことを目的とするのではなく、保育者に見守られた安心感のある環境の中で、子どもたちが多様な人と出会い、自然な交流が生まれる機会をつくることを狙いとしています。

また、現在、江府町には幅広く利用できる公園がなく、多くの家族が休日には近隣の町の公園や屋内施設へ出かけています。もちろん、これらもパブリックな施設であり、そこにはさまざまな人との偶発的な出会いがあります。そうしたパブリックな場に出かけることに対して、多くの家族が常に不安や恐怖を感じているわけではないと考えています。むしろ、コミュニティパークでは、子どもたちが安心して過ごせる環境を確保しながら、地域のさまざまな人と自然に出会える機会をつくることに意義があると考えています。

■『「低年齢層の園児に対して社会性を育成する」とは、いかなることを示すのか想像が及びません。』

→乳幼児期は、単に知識を身につける時期ではなく、「自分以外の人とどう関わるか」という将来必要とされる力(コミュニケーション能力)の土台をつくる時期と考えています。こども家庭庁「はじめの100か月

の育ちビジョン」(妊娠期から小学校1年生までがだいたい100か月)の中でも「地域において、様々な人が関わり合い、繋がっていくことで、こどもの育ちを支える環境や社会の厚みが増していきます。」と記載されています。

【出典】

https://www.cfa.go.jp/policies/kodomo_sodachi/?utm_source=chatgpt.com

また、厚生労働省の「保育所保育指針」の「1 保育所保育に関する基本原則－(4)保育の環境」では、以下のように述べられています。

「エ 子どもが人と関わる力を育てていくため、子ども自らが周囲の子どもや大人と関わっていくことができる環境を整えること。」

【出典】

https://www.mhlw.go.jp/web/t.doc?dataId=00010450&utm_source=chatgpt.com

江府町では、0歳から15歳まで、ほぼ同じ顔ぶれの中で進級していく環境にあり、他の地域と比べると、様々な人との関りから学ぶことや育っていく機会が少なくなっています。

現在、子供の国保育園においても、異年齢保育を取り入れるなど、子どもたちが多くの人と関わる機会をつくる工夫をしながら保育を行っています。コミュニティパークでは、こうした地域の状況を踏まえ、子

どもたちの社会性を育むために、「人と関わることを自ら選択し、行動できる環境」をつくることを目指しています。実際に、住民の皆様と一緒に行ったワークショップにおいても、「高校などで町外に出ると、人との関わりに臆してしまうことがある」「江府町の教育環境として、子どもたちが多様な人と関わる機会が少ない」といった意見がありました。

このような地域課題を踏まえると、コミュニティパークには、単に遊具や広場を整備するということだけではなく、子どもたちが地域の中で多様な人と出会い、自ら関わる経験を積み重ねることで、将来につながる社会性を育むという最大の目的があります。

「公園は箱ものの一つ」という見方もあるかもしれませんが、コミュニティパーク事業は、単に施設を建設することを最終目的とするのではなく、地域が抱える「子どもたちが多様な人と関わる機会が少ない」という課題に対して、子どもたちの社会性を育み、その先に求められる、社会の中で自ら人と関わりながら生きていく力を育てるための環境を整備するものです。

■『「保育園らしくない保育園」という言葉を初めて聞いた時、「低年齢の園児たちのお昼寝時間にクラシック音楽の名曲を繰り返し流す」「高年齢の園児たちのためには、ネイティブの発音を聞き取らせるキッズ英語講座を設ける」などと勝

手に想像していましたが…』

→「保育園らしくない保育園」の名称に込められた想いは、ご意見いただいた「先進的な保育の提供」や「新たな保育プログラムの開発」にとどまるだけでなく、子どもたちの社会性の育成や人との関わりの創出など、さまざまな地域課題に対して、「保育園」を一つの軸としてアプローチし、子どもの成長だけでなく、地域全体のつながりや人の成長にもつなげていく、前例のない行政施策全体を総称して表現した名称です。決して、現状の保育や一般的に言う「保育園」を否定するものではありません。

3. 補助金と一般財源(税金)のバランスは難題

■『子供たちに最良の教育環境を提供することは、私達大人の大きな役割の一つです。』

→おっしゃるとおりだと考えます。

私たちは、現在の江府町にとって、コミュニティパークこそが「最良の教育環境」の一つになると確信して進んできました。今後、デジタル社会の流れはさらに加速することが想定され、ネットワークを通じた人との関わりやつながりは、これまで以上に増えていくものと考えられます。だからこそ、実際に人と向き合い、関わる機会は、これまで以上に意識的につくっていく必要があります。これからの時代に必要なのは、人と「つながる」ことだけではなく、人と関わる力や、多様な人とのつ

ながりを楽しむ力を育むことだと考えています。コミュニティパークは、子どもたちが保育者や家族だけでなく、地域の様々な人と出会い、自ら関わり、つながる経験を積み重ねることができる場です。そのような「人とつながる力」を自然に育むことができる環境こそ、これからの子どもたちにとって最良の教育環境の一つになると考えています。

■『多目的に使用すべき税金を使う以上、極力無駄を省かなければなりません。』

→現在計画している「保育園」と「公園(人とつながる場所)」をそれぞれ別々に整備する場合、土地の取得、造成、建築等に係る費用がそれぞれ必要となるため、現在のコミュニティパーク計画と比較して、さらに多くの税金を投入することになります。また、平地が限られている江府町において、保育園と公園をそれぞれ整備するための適地を確保することは、現実的にも非常に困難な状況です。仮に保育園のみを整備した場合、利用は年間約 250 日の保育日に限られます。一方、保育園としての機能を確保しながら、公園として休日や保育時間外にも地域の方々が利用できる機能を融合することで、一つの施設をより多くの人が、より長い時間活用できる環境をつくることができます。これは、複数の機能を一つの施設に詰め込むという考え方ではありません。限られた土地と財源の中で、保育園として必要な機能を確保しつつ、地

域の人が集い、人と人がつながる公園としての機能も持たせることで、施設の利用価値をより高めるものです。江府町の財政状況や土地の制約を踏まえれば、一体的に整備することを選択したコミュニティパークは、限られた資源でより多くの効果を生み出すための最善の選択であると考えています。

4. VE提案はブラックボックス

→事業費が膨らんだことを踏まえ、単に「何かを削らなければならない」「何円削減できたか」ではなく、「限られた財源で、何を残し、何を実現するのか」。この考え方で進めてきたのがコミュニティパークにおけるバリューエンジニアリング(VE)です。

コミュニティパークの計画は、町民ワークショップ等を通じて、沢山のご意見や「こんな場所があったらいい」という思いをできる限り取り入れ、町として実現したいという考えのもと、計画を策定してきました。しかし、多くの意見や機能を盛り込むほど、必要となる設備が増え、事業費は大きくなっていきました。そこで、取り組んだのが「バリューエンジニアリング」です。

単純に事業費を削減するのではなく、「本当に必要な機能は何か」「その機能を、より少ないコストで実現する方法はないか」という視点か

ら、事業そのものを改めて見直してきました。町民の皆様からいただいた思いや事業の目的を損なうことなく、一つひとつの機能や仕様を精査し、必要なものを残しながら、整備方法や規模、設備、材質、構造等を見直してきました。

○設計完了前の VE(令和 6 年度～令和 7 年度 10 月まで)

- ・ランチルーム及びオーバルデッキの幅を 5,000 mm から 4,550 mm に縮小
- ・イマジネーションツリーのスキップフロアの廃止
- ・Den(子ども隠れ家)及びイマジネーションツリーの地下トンネルを廃止
- ・スターライトラボの設置を簡易的な構造に変更
- ・外壁を木版からガルバリウム等金属貼に変更
- ・園庭側のサッシを木からアルミに変更
- ・屋外ステージ(ハイブリッド公園部分)の廃止
- ・施設一体型の屋外遊具(ネット遊具)の廃止
- ・キャノピー(いわゆる車止め)の廃止
- ・パーゴラ(オーバルデッキ各地に設置予定だった日除け)の廃止
- ・各エリアのウッドデッキの幅の調整
- ・アドベンチャーヒルの盛土を調整
- ・エントランス横の階段を削除

○設計完了後の VE(令和 7 年 11 月～令和 8 年 6 月まで)

- ・照明の数を調整
- ・外壁の素材や塗装の調整
- ・植栽の数量を調整
- ・芝生の単価を低減
- ・地下水利用によるランニングコストの圧縮(作井工事_完了済み)
- ・保育室内の水道を 2 学年に 1 つに調整(保育士と協議・同意済)
- ・遊戯室の扉を削除し、常にオープンな空間へ(当初はスライド式の扉が予定されていた)

OVE プラン(実施はしていないが検討したこと)

- ・オーバルデッキの廃止
- ・イマジネーションツリー及びアドベンチャーヒルの廃止

以上のように機能・規模を見直し、VEを実施してきましたが、物価上昇（単価の置き換え）が、削減額を上回ったため、当初より事業費が増えています。しかし、当初の「やりたいこと」を単純に削るのではなく、「何のためにつくるのか」という本質に返り、限られた財源の中で、より大きな効果を生み出す計画をめざしています。必要な機能の精査を、外部アドバイザーや設計業者と連携し、コストを抑えながら、最大限の行政効果を発揮する施設として作り上げてきた自負があります。

5. 公園の運営・維持のための費用計上とルール作り

■『「公園」と「保育園」の個別の管理方法及び敷地境界の管理方法など、今後の入念な議論が必要と思われます。』

→ご意見のとおり考えています。議論するまでの骨子はまだ出来上がっていませんが、施設運営体制の検討は進めております。令和8年7月28日の江府町議会公共施設建設調査特別委員会において、加藤邦樹議員より「施設全体の管理体制・事業運営体制」について質問がありました。執行部より、「新年度に向けて叩き台を作っている。建設事業が議会承認されたら議論を煮詰める。新年度にある程度の骨格を示し、準備的な組織を作ることを目指す」と回答しています。

境界の管理方法(セキュリティ)については議会、住民説明会、保護

者説明会で説明してまいりましたとおり、ゲートで仕切り、視認性がある中で確立をしています。

6. 一般財源から支出

■『…ふるさと納税関連の基金募集にあたっては、高額な返礼品や外部委託料などの経費が発生しています。』

→ご指摘のとおり、寄附を受け入れるために一定の経費が発生しています。

ここで重要なのは、単に経費が発生することではなく、「必要な経費を投入した上で、最終的に町財政にどの程度プラス要素が確保できたか。そして、その財源をどのように有効活用できたか」という点であると考えています。

ふるさと納税によって確保した財源を基金として積み立て、町が必要とする施策に計画的かつ効果的に活用することは、限られた一般財源を留保し、町の政策を実現する上で非常に有効となる財源確保の方法です。また、歳入を確保するために一定の歳出を伴うことは、ふるさと納税に限ったことではありません。行政においても、事業を実施するためには一定の経費が必要であり、「経費をかけずに財源だけを確保する」という考え方だけで財政運営を評価することは困難です。

「経費が発生している」という事実だけで、ふるさと納税を財源とし

て活用することに問題があるとは考えていません。制度の仕組みを踏まえた上で、経費に対してどれだけの財源を確保し、その財源によって町民にどのような行政サービスや政策効果を還元できているかを見ることは、今回の建設事業に限らず、他の事業に関しても同様です。

■『建築工事完了後に発生する費用は補助金対象とはならず、一般財源からの支出となります。完成後、早々に備品購入費2億円が計上されています。』

→備品購入費についても、建築工事と同様に、対象となる経費の2分の1について国庫補助金を活用する計画としています。また、残る経費についても、クラウドファンディング等の財源を活用することで、一般財源からの支出を抑制する考えです。

国庫補助金等の財源が活用できることを理由として、必要以上の備品を新たに購入したり、使用可能な備品を更新したりすることは考えていません。現在の保育園で使用している備品についても、その状態・今後も継続して使用できるかを一つひとつ確認した上で、使用可能なものについては引き続き活用する方針です。その上で、新たな保育環境において必要性が高いものや、現在の備品では十分に対応できないものなど、子どもたちのより良い保育環境を実現するために必要と判断される備品についてのみ、新規に調達する考えです。補助金を最大

限活用して購入額を増やすという考え方ではなく、前述の VE の考え方と同様に必要な機能を確保しながら、限られた財源を効率的に投入するという考え方に基づくものです。

<まとめ>

■『コミュニティパーク事業は、「保育園」と「公園」という異質な施設の組み合わせです。』

→ご指摘のとおり、「保育園」と「公園」は、本来それぞれ異なる目的を持つ施設です。

しかし、私たちがコミュニティパークで目指しているのは、単に異なる二つの施設を一つの場所に整備することではありません。江府町が抱える「子どもたちが多様な人と関わる機会が少ない」という地域課題に対し、「保育」という町の機能を軸として、「人と人が出会い、つながることのできる場所」をつくることで、子どもの育ちと地域のつながりを同時に育んでいくことを目指しています。そのため、コミュニティパークは「保育園＋公園」という施設の組み合わせだけを見れば異質に見えるかもしれませんが、町としては、その二つを組み合わせることこそ、江府町にとって意味があると考えています。また、今回の計画は、町民の皆様からいただいたご意見やご期待をベースとしながら

も、事業費については VE を実施し、必要な機能と費用を一つひとつ精査してきました。財源についても、国庫補助金、ふるさと納税、クラウドファンディング等、活用できる財源を最大限に組み合わせ、可能な限り一般財源の負担を抑える努力をおこないました。

完成後の運営方法、維持管理、保育と公園の機能をどのように両立させていくのかなど、今後さらに議論し、具体化していかなければならない課題もあります。しかし、だからこそ施設を「建てて終わり」にするのではなく、完成後の使われ方までを含めて、町民の皆様とともに育てていく施設にしたいと考えています。

コミュニティパーク事業は、単なる「箱もの」をつくる事業ではありません。子どもたちが人と関わる力を育み、地域の中で多様な人と出会い、つながり、楽しむことができる環境をつくる。そして、その環境を子どもだけでなく、地域の誰もが利用できるものにしていく。そのために、保育園と公園という二つの機能を一体的に整備し、限られた土地と財源を有効に活用しながら、江府町に必要な環境をつくろうとしているのが、コミュニティパーク事業です。

全国の保育園との複合施設参考例

1) 揖屋ふれあい広場・揖屋幼保園

令和10年に公園部分が共用され、令和11年から幼保園と周辺道路が共用予定です。

<https://www.city.matsue.lg.jp/soshikikarasagasu/shisho/higashiizumoshisho/h-tiiki/23331.html>

2)桑名福祉ヴィレッジ

少子高齢化や人口減少、福祉ニーズの多様化・複雑化など、福祉分野を取り巻く環境は大きく変化してきています。それらの課題に対応した福祉サービスを確保するため、高齢者・障害者・子どもなどに対して通所や入所、相談などを包括的に提供する多世代交流・多機能型の福祉施設の整備が令和4年4月にオープンしました。（HPから引用）

<https://www.city.kuwana.lg.jp/fukushi/kurashi/machidukuri/28-0-220-896/28-80463-220-896.html>

■『江府町は、果たして「人と人の分断」があり、「人と人のつながりが深刻」な状態なのでしょうか。江府町には、伝統的な「おすそわけ文化」が強く残っています。』

→もちろんその文化を否定するつもりはありません。実際にそれぞれの地域に根付く江府町の大切な文化だと思います。もし、文面から町の文化を否定されたお気持ちになられたとしたら、誤解を招く表現であったかもしれません。お伝えしたいことは、このまま何もせず人口減少していけば、状況が深刻化していくということです。人口が減り人と接する機会が減れば、人を受け入れたり、繋がりが薄れることは容易に想像できます。皆様がおっしゃるように小さなコミュニティが継続できている今だからこそ人のつながりをつくっていく取組を進めなければなりません。ぜひ施設を活用いただき、小さなコミュニティの活動の場の一つとしていただきたいと思います。

…人が生きていく中で、どんな場面でも異論を「反対意見」として排除するのはたやすいことです。

今回私たちは、いただいたご意見を、事業をより良いものにするための大切なご意見として受け止めています。ご懸念いただいた安全性、財政負担、施設運営、維持管理等についても、これまで重ねてきた議論を軸に不安を安心に変えていくよう、一つひとつに向き合います。

その上で、現在の江府町に暮らす子どもたちにとって、そしてこれから江府町で育っていく子どもたちにとって、「人と出会い、人と関わり、人とつながることのできる環境」を残すことは、行政の責任であると考えています。

コミュニティパークが、子どもたちの成長の場となるだけでなく、地域の人が集まり、世代を超えてつながり、「江府町で育ってよかった」「江府町で暮らしてよかった」と思える場所となることを、私たちは願っています。

そのために、いただいたご意見を糧として、「最低でも日本一」のコミュニティパークを実現するため、ぶれることなく進んでいきたい……決意を新たに組み組んでまいる所存です。